新しい世界と向き合うこと

社会福祉学部　社会福祉学科 2 年
地域福祉コース　山崎ゼミ
今井綾香

バスツアーから始まった 1 年間のサービスラーニングを通しての活動を行ってきて、私は自分の中でまだ未開拓な領域に挑戦し向き合うことと人と真の意味を持って向き合うこと、また施設が施設として独立しすぎないことの大切さを知ることができた。この 2 点の気づきをまとめていきたい。

① 自分の成長と気づきについて

サービスラーニングの活動の中で、私は何度も「向き合う」ことを意識することがあったように感じている。それは自分自身とでもあり、活動でかかわる人たちとでもある。

活動を始める前、私は障害分野にどうしても関心を持つことができなかった。なぜならば、これまで生きてきた中でかかわる機会が少なかったためである。そのため、夏季休暇中の現場体験先を決めるうえでも迷いがあった。しかし、関心がまだ持てていないからこそ、かかわることで自分の中の価値観が変わる体験ができる可能性があるのではないかというゼミ担当の先生の言葉を聞いて考えるようになり、少しづつでいいから向き合うことを自分からしてみようと思えるようになった。その分不安もあったが、逃げるのではなく挑戦してみようという気持ちを持つことで、自分の中にあった偏見や価値観が変わる出来事に出会えた。それは、どんなものを抱えどんな状況にあろうとも、私たちは皆同じ人であるのだということを感じられたことだ。障害という言葉を聞くと、私はこれまでどこか特別視してしまう考え方を持っていた。また、そこに重度障害という言葉が付け加わると、その方のことを何も知らないままに怖いと感じる心も持っていたように思う。しかし、実際に活動をしていく中で施設の利用者と関わる機会を得て、そうした思いを抱いてしまうのは自分自身の中で未知の領域にある事柄だったためだと気づいた。障害に対して怖いという思いを持っているのではなく、知らなかったからこそ足を踏み入れることが怖かったのだ。これはかかわりを持つ中で気づいたことであった。障害がある方や心に傷を持つ方も、自分とは違った面があると感じることはあったが、その方たちの根本にある嬉しいや悲しいといった感情面に違いはないことがわかった。また現場体験をするまでは、支援を行う立場の者は利用者が行うすべての物事の手伝いをしているのだと思っていた。けれども、利用者は皆自分の考えを持ち動き、表現し、自分の人生の中で一生懸命に生きる強さとたくましさを持っているということが一緒にいて伝わってきた。これは、机上の勉学だけでは知りえなかったことであった。そして支援をする立場を経験してみて、私はまだまだ自分の立ち位置ややり方が全く定まっていないことを実感した。ここは、経験がものをいう分野でもあると思う。それでも、活動をするにあたり行っていたように、毎回はじめにその日にかかわる利用者の今日までの情報を頭に入れる時間をつ

くるなどして、相手自身について知っておくことで本当に求めているものに寄り添い支え合える関係が築けることにつながると思われた。そうした行動を、かかわる側が行っていく大切さがわかった。そうした他者理解の重要性を考えたうえで、その方たちと無理なくかかわっていくためには自分がどういった人間でどんなことがでいるのかという、自分らしさを知る自己覚知もこの先必要になっていくことにも気づくことができた。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

地域の取り組みや市民活動などの地域づくりを考えていくうえで、サービスラーニングのバスツアーで NPO 法人ネットワーク大府で伺った話が印象に残っている。それは、他の市にあるような事業がないことも利点と考える点だ。この NPO 法人がある場所では、周りの市にあるような市民病院がないといっていた。私はこの話を聞いて、はじめは地域に求められている事業はどんどん取り組んでいけばいいのではないかと考えていた。しかし、そうしたひとつの施設がないことで、その分お金を NPO や児童教育にまわせる財政状態が生まれる地域もあるのだと教えられた。地域福祉を考え活動していくうえで、ひとつの物事にとらわれた見方をするのではなく、この活動を行ったら、反対に行わなかったら、地域にとってどんなメリットやデメリットが起こりうるのかという多面的な考えと視点を持って取り組むことが重要になることを知り、そうした取り組みがすでに行われている地域の現状に触れる機会になった。

現場体験先においても、その立地が住宅街にあることが気になり職員の方に尋ねてみた。すると、施設の周りに地域住民の目があることで、外に出る少しの機会にも地域の方と交流したり、地域性を高めることにつながるためであるようだった。外出の際に付き添わせていただいたが、利用者が店員の方と話をしたり、挨拶やお礼を自分から行っている姿を見た。そうした体験からも、施設が施設の中だけで成り立ってしまうのではなく、外との交流を交えることで利用者の可能性を高める活動が施設にいる間もできているのだと感じられた。しかし、少しでも外に出ると不安を感じてしまう子もいるそうだった。だれもが過ごしやすいまちづくりを目指す際に、そうした体験をした者やその方に近しい者などから話を聞き、地域や行政、NPO の連携により不安因子をぬぐっていく活動につなげていくことができるのではないかとも感じられた。

地域に出て、自分の関心の外側にあった新しいことに向き合うことをしていなければ、学べないことがあるとこの 1 年間の活動で知ることができた。人と向き合い、地域と向き合い、そして自分自身とも向き合うこと。そうした体験を、これからも挑戦していくことでその先の学びや将来の選択に活用していきたい。

障害を持った児童とのかかわりと施設での体験

社会福祉学部　社会福祉学科 2 年
地域福祉コース　山崎ゼミ
太田良香帆

私はサービスラーニングをさせていただいた活動先は知多地域障害者生活支援センターらいふである。重度障害児の支援をしている日中一時支援事業を行う「らいふ」と軽度障害児を支援している放課後等デイサービス事業を行う「そよかぜ」で 3 日ずつ活動を行ったのである。学生企画の内容は「らいふ」で鉛筆立てづくり、「そよかぜ」では縁日プログラムを行った。

① 自分の成長と気づきについて

私は、障害児や障害者に対して苦手意識や恐怖心、偏見などを持っていた。しかし、障害があるからと言って私たちのような健常者とは全く違う人間ではないのである。そして、重度の障害児の子に対しても軽度の障害児の子に対しても同じ障害を持っているからといって全員が全員同じ人間であるとは限らないということである。なぜなら、興味のあることや好きなこと、得意なこと、苦手なことなど人それぞれ違うのは当たり前であり「この障害だから・・・」と考えてしまうのは、個性をなくしてしまっているのである。その子自体を見ることにより、どのような声掛けをするか、どのような対応をするかが変わってきて深いところまで支援することができるのである。重度の障害児は、自分のことが自分でできないことが多く、1 対 1 の支援が必要となる。そして、言葉で自分の意思を伝えることができない子もいた。そのようなときに非言語コミュニケーションを使い、意思を伝えようとしてくる。物を指さししたり紙に書いて伝えたりなどさまざまである。それを間違った捉え方をしてしまうとパニックを起こしてしまうこともあるため、伝えたいことを理解する力も必要であると学んだ。そして、注意するときには「〇〇してはいけません」のように否定をせずに、「〇〇しません」のような短くわかりやすい言葉を使うことに意識をした。意識や視線を支援者のほうに向けなければ今からやることや伝えたいことが伝わらないため、名前を呼び、こちらを向いたら話し始めることが大切になるのである。軽度の障害児は、自分のことをできないことも多少はあるがある程度のことはできる子が多く、できないことや難しいことは自分から声をかけて手伝ってもらうようにするという訓練をしていた。そして、軽度の子も同じ障害の子によっても性格が全く異なり、支援者も接し方を変えていかなければならないこともあった。支援者も 10 人に対して 2 人、3 人という感じの少なさで、好きなことをやっているのを見守るという支援であった。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

活動を通して、そよかぜでは小学生が多いため、みんなでご飯を作って食べて、自由時間は好きなことをして遊び、工作をしたり洗濯機の使い方を勉強したりと家でも手伝えることをやっている。しかし、それをお手伝いという形で家庭の中で行うことがある家庭とない家庭で差が開いている。何らかの障害を持つ子は、指先が不器用であったり覚えることが苦

手であったりするため、1 度やっただけでは覚えることができない。そのため、家庭の中で少しでもやっておくことも大切である。日中一時支援を行っている「らいふ」では就職したときのことを考え、自立課題というものを行っている。自立課題とは、簡単で手を使った問題を施設にきて荷物を置いた後にすぐに取り組んでいる。目的は、工場などに就職したときに決められたことをスムーズに行うことが大切であるため、その作業のように課題を進める訓練をしている。障害者というだけで差別をされ、障害者だから仕事ができないなどの偏見をなくし、決められたことはできるようにしておくことで地域や社会に出たときに困らないようにするなどの政策もされている。

見えていなかったもの、無意識のうちに見ようとしなかったものに気付く

社会福祉学部　社会福祉学科 2 年
地域福祉コース　山崎ゼミ
清水翔太

①　自分の成長と気づきについて

a.3 つの成長

私はこの一年で 3 つ成長して、2 つのことに気が付いた。成長の 1 つ目は今まで苦手だった新たな人間関係づくりに積極的になれたことである。私と同じサービスラーニング先に行くメンバーはほとんど話したことのない人ばかりだったが、より良い活動になるようにと互いに協力し合えたことでよい関係になることができた。成長の 2 つ目は自分の苦手なものに対してはきちんと意思表示をし、得意な人に任せられるようになったことである。私は前で発表するのが苦手であまり好きではないのだが、サービスラーニングの活動報告では私がパワーポイントを作り他の人に多めに発表してもらうという形にしてもらえた。苦手な発表を克服するのも大切だとは思うが発表が得意な人がいるときは任せてもよいのだと私は思った。そして成長の 3 つ目は NPO ごとの特色を理解できた点である。本講義を通して多くの NPO と関わることで障害児や高齢者など幅広い方に支援をする NPO もあれば対象を絞ってより充実した支援をしている NPO があることを知り、支援が似ているところはあっても同じ支援をしているところはないように感じた。それは NPO ごとに活動理念や発足の理由の違いにより異なるのだと理解することができ NPO について今までよりも知ることができた。

b.2 つの気づき

気づきの 1 つ目は上記にもあるように NPO ごとに特色があることに気付くことができた点である。今私は AJU さんでアルバイトをさせていただいているが、それ以外の NPO さんとはあまりかかわってこなかった。そのため NPO が社会の中でどのような立ち位置でどんなことをしているかくわしく知らなかったため「社会で困りごとを抱えている人の支援をしているのが NPO だ」としか思えていなかった。しかしサービスラーニング等で多くの NPO の方と関わったり、実際に利用している方と会ったり話を聴くことでただ利用者さんに支援をしているだけでなくその周りの環境や社会も変えようとしている NPO も多いことに気付くことができた。そして様々な NPO が細かなニーズに対応していることで充実した生活を送れている利用者さんも多いのだとわかった。気づきの 2 つ目は地域に困りごとを抱えながら暮らしている人は自分の思っている以上に多いという点である。ゼミの担当をしてくださっている山崎先生の運営する絆さんの絆祭りに参加させていただいたときに、一緒に屋台を運営してくださった方が絆の利用者さんで、職員さんだと思うくらいしっかりしている方だったため先生に話を伺うまで気づかなかった。そこで私は重度で常に支援が必要な人が NPO を利用しているとばかり考えていたため、軽度で日常で少しだけ支援が必要な人を無意識のうちに外してしまっていたことを痛感した。そういったパッと見ただけでは支援が必要かわからない表面化していないニーズを持つ人は社会に多くいるのだと気づくことができた。そしてその「見ようとしないと見えない問題を抱える人」の日常を支えるために NPO が重要だとわかった。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

私は今回のサービスラーニングで障害児の居場所づくりをしている NPO のらいふさんに行かせていただいた。今まで障害児と関わることがなかったため、どのような支援をしていてどのような人が利用しているのかよく分かっていなかった。そのため、今回のサービスラーニングで障害児の支援の現状と課題を知ることができた。まず現状として障害児の居場所づくりをさらに充実させていく必要があると感じた。らいふさんでは重度から軽度の知的障害児を預かっており、その支援内容も一人一人に合った支援をしていた。しかしサービスラーニング中の施設の様子として一人で過ごすことのできる児童は少し職員さんの目が届きづらいように感じた。やはり職員さんも複数の児童を同時に見なくてはいけない現状があり、どうしても障害の重さや児童の様子によって目をかける時間に違いが出てしまうのだと思った。そのほかにも課題として施設内だけでなく家庭に戻った時に家族の協力も必要と職員さんが仰っていたが、協力的な家庭もあれば施設に任せっきりになってしまっている家庭もあるそうで、家族と協力できなくてはせっかく施設で学んだことも生かせる場がないため、家族の方にも協力を仰いでいかなくてはいけないと思った。

地域の抱える現状としては 3 つあると考えられる。1 つ目は上記にもあるように当事者支援の充実である。NPO により少しずつ当事者支援は充実してきてはいるもののまだ完全ではないと思う。そして 2 つ目は地域の人との協力である。らいふさんでの支援は施設内で完結しているものも多くなかなか地域の人が協力するときがないと感じた。そこで施設内だけでなく社会の中で生活していく力を障害児に身に付けられるようにすれば居場所づくりがさらに充実するのではないかと思う。そのためにまずは地域の人に知ってもらう必要があると思うので講演会などで当事者の現状を知ってもらえればよいと考える。そして 3 つ目は日本福祉大学生の意識の向上である。今回のサービスラーニングで福祉についてあまり興味のなかった学生が興味を持つようになったとゼミ内で感じる。そこでサービスラーニングのように福祉の現場を学ぶ機会をさらに作ることで地域の現状を知り、自分にできることはないかと考えはじめ実行をすることで地域の抱える課題の解決の力になると思う。